

サイエンスコミュニケーター養成プログラムにおける 学習内容と各プログラムの特徴

相原 佐記

科学技術の発展に伴って我々の生活はより快適で便利なものへと変化し、今や科学技術を利用することなしに生きていくことは困難である。しかし、科学技術が我々の生活に与えたものは決して快適さや利便性だけではなく、我々は環境問題に代表される科学技術に起因する複数の社会問題も同時に抱え込むこととなった。そのような問題は、社会と科学技術が深く関わり合い、科学技術の専門家以外の一般の人々の利害も関わってくることから、一様に解決することが困難な状態となっている。そのような背景から、科学技術と一般の人々を繋ぐサイエンスコミュニケーターの活躍が期待されている。現在、大学や博物館等様々な機関でサイエンスコミュニケーターの養成が行われている。本研究ではそれらの中でも体系的なプログラムに基づいてサイエンスコミュニケーターの養成を行っている取り組みを「サイエンスコミュニケーター養成プログラム」と定義し、各々の学ばれている内容とそれらがどのように学ばれているのかを調査し、各々のプログラムごとの学習内容の特徴を明らかにすることを目的とする。本研究では国立科学博物館、東京大学、北海道大学、早稲田大学、静岡科学館がそれぞれ行っている5件の養成プログラム、合計95科目の学習内容と、それらに関連する受講者の行動に着目し、シラバス等における科目の概要を示す部分から各々の学習内容を整理した。学習内容に関連する受講者の行動については、受講者がその学習内容に対してどのように取り組むかによって学習内容を知識・技術・経験のいずれかに分類した。調査の結果、学習内容の中で、知識として学習されないものはなく、養成プログラムにおいては、学習内容についての知識を得ることが基本であると考えられていることがわかった。次に、各学習内容を取り上げているプログラムの数に注目した結果、すべてのプログラムで学ばれている内容は存在しなかったこと、また1か所のプログラムでしか扱っていない学習内容が半数以上を占めていることが明らかになった。また各プログラムの特徴に着目した結果、静岡科学館以外は各々のプログラムにおいて固有に学習されている内容が存在することがわかった。以上のことから本研究は、今後のサイエンスコミュニケーション養成プログラムの更なる質の向上や、養成プログラムに参加しようと考えている人の判断の一助となることができると考えられる。

(指導教員 三波千穂美)